

キャラクター名  
待雪 影虎

プレイヤー名

シンドローム	バロール エグザイル		ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	警察官
	オプション		年齢	28	性別	男
覚醒	命令	衝動	殺戮	初期侵食率	40	%
出自	疎まれた子	経験	汚れ仕事	邂逅	殺意	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	54
肉体	2	1	0			3	行動値	6
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	6
精神	2	0	0			2	戦闘移動	11
社会	2	0	0			2	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			RC	1		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	4	
運転:			芸術:			知識:			情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
インターセプトアーマー	

合計装甲: 0    合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
雪村□□	P 尊敬	N 憎悪		
切通 充悠	P 庇護	N 劣等感		
	P	N		
垂純血	P 誠意	N 嫌気		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12    残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果: 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果: コスト分のHPで復活								
孤独の魔眼	1	4	オート	視界	効果参照	自動	-	
効果: あなたを対象に含む「対象:範囲」または「対象:範囲(選択)」の攻撃の判定が行われる前に使用する。その攻撃の対象をあなたひとりに変更する。その攻撃であなたはカバリングの対象にならない。								
守護者の巨壁	1	6	オート	視界	自動	自動	リミット	
効果: 前提<命のカーテン>:その攻撃の対象を「対象:単体」とし、あなた一人に変更する。								
崩れずの群れ	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果: カバリング。このカバリングによって行動済みにならず、行動済みでも使用できる。1メインプロセスに1回使用できる。								
グラビティガード	3	3	オート	至近	自身	自動	-	
効果: ガード値+(Lv)D								
命のカーテン	3	4	オート	至近	自身	自動	-	
効果: <崩れずの群れ>を使用する前に宣言。10m離れたキャラクターに行える。1シナリオにLv回。								
異形の刻印	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果: 最大HPを+[Lv×5] 浸食値+3								
がらんどうの肉体	1	3	オート	至近	自身	自動	ピュア	
効果: ダメージを-(Lv+2)D 1R1回								
魔人の盾	3	4	オート	至近	自身	自動	-	
効果: ガード値+(Lv×10) 1シーン1回								
グラビティテリトリー	3	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果: HPを+[Lv×7]する。基本浸食値+4								
ディメンジョンゲート	1	3	-	至近	効果参照	自動	-	
効果: 空間を捻じ曲げて、遠く離れた自分が知っている場所に繋がるゲートを作り出すエフェクト。								
魔王の玉座	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果: 重力を操作し、常に空中を浮遊して行動している。								
効果:								
効果:								

待雪 影虎:まちゆき かげとら  
コードネーム:Aigis:アイギス

一人称:俺  
二人称:お前

日本人。雪村分家の子供。  
UGNに支部を持つ家の生まれであり、オーヴァードとしての覚醒は比較的早かった。  
チルドレンと呼称される年齢からだったかもしれない。  
そういう命令だ。覚醒するべき能力はそれではなかったかもしれない。  
だが、護ることこそが仕事であり生きる意味であると命令された。  
生を受ける前から決められていたことだ。逆らうことは出来るはずはなかった。  
それに対するコンプレックスを抱えて生きてきたが、  
とある仕事での彼との約束を機に彼を護る事を決意。

盾役としての仕事への誇りも、自信も彼に肯定されてようやく受け入れられたものだ。  
誰かを護るための仕事を誇りに思ってくれる人が居るからこそ、漸くその力の使い方を決定出来た。

「充悠」  
「俺のものだ」 「誰にも渡さない」